研究課題名	宿便性閉塞性大腸炎の急性期の臨床像と手術適応に関する検討
研究の主旨および目的	病変閉塞性大腸炎は9割強が大腸癌が原因とされ、宿便による閉塞性大腸炎は稀な疾患である。宿便による閉塞性大腸炎は、結腸壊死による緊急手術を要する疾患であるが、症状は非特異的で、腹部所見が軽微であることも少なくなく、手術決定の判断に難渋することをしばしば経験する。また、経過中に結腸壊死が進行したり、非閉塞性腸間膜虚血症を合併し、追加の腸管切除手術が必要になった症例報告が散見される。現在、宿便性の閉塞性大腸炎について、症例報告以上の論文はなく、手術適応や、術式、経過等、疾患に関する情報は十分ではない。そこで本研究は、宿便性の閉塞性大腸炎の患者の急性期の臨床像や治療経過を明らかにし、診療や手術適応判断の一助となることを目的とする。
研究デザイン	症例対象研究
対象	2011年4月から2021年7月の間に宿便による閉塞性大腸炎の診断で、当院の救急科に入院した患者。 閉塞性大腸炎の診断は、 ① 炎症および潰瘍が閉塞部の近位側に存在 ② 閉塞部の肛門側粘膜は肉眼的組織学的に正常 ③ 閉塞部と炎症部との間に正常粘膜が存在 ④ 非特異的炎症でアメーバや潰瘍性大腸炎の所見を認めない を満たすものとされる。 ③ については、腫瘍性の場合は、腫瘍の存在により腸管が拡張せず腸壁張力が上昇しない（Laplaceの法則）に則っており、宿便の場合は合致しないとの報告が多く、①②④を満たすものを宿便性閉塞性大腸炎とする。①②④の評価や、閉塞機転の診断は、手術症例については切除標本や術中所見から行い、非手術症例については、CT 画像結果や直腸疹、下部消化管内視鏡（colonoscopy、以下CS）等により行う。壊死性の虚血性腸炎や、宿便による消化管穿孔症例は対象から除外する。
方法	過去の診療録と手術記録に「閉塞性大腸炎」と病名登録のある患者を抽出し、下記評価項目の情報を得て、 ① 閉塞性大腸炎の臨床所見や経過 ② 対象患者を、結腸壊死の有無で2群にわけ、来院時のバイタルサインや、来院時採血結果等を比較し、術前に壊死を予測できるかについて検討する。
評価項目	対象患者の年齢、性別、既往歴、初発症状、発症から受診までの時間、バイタルサイン（心拍数、収縮期血圧、shock index、呼吸回数、体温

	)、腹部所見、CT 所見、血液検査結果、手術の有無、術式、壊死の進行の有無、血液培養結果、術後経過、予後等。
研究組織	公立豊岡病院　但馬救命救急センター
相談窓口	公立豊岡病院　但馬救命救急センター 救急科医師：番匠谷　友紀 電話番号：0796-22-6111